

====このお便りは私が担当する太極拳教室の皆さんに毎月（今年度から8月も！）お届けしています。====

トピックス 各教室で昨年度の皆勤者、精勤者を表彰

例年通り、平成20年4月から平成21年3月までの1年間の表彰を行いました。皆勤賞は「瑞江鶴の会」では藤城弘子さんが、また「亀戸スポーツセンター教室」では松田早苗さんと梅津勲さんが獲得されました。梅津さんはこれで4年連続の皆勤賞受賞です。また「東大島鶴の会」では、山本昌夫さん光子さんご夫婦が欠席回数わずか1回ということで、おそろいでトップ賞を獲得しました。「代々木鶴の会」を含め各教室で精勤賞相当の方々にささやかなグッズをお贈りしました。

東京都支部会員が大幅増

各教室において平成21年度の日本健康太極拳協会・東京都支部会員の継続、新規入会の手続きをいたしました。3月末現在の21年度会員数は瑞江鶴の会27名、東大島鶴の会29名（全員）、亀戸スポーツセンター教室17名、代々木鶴の会14名（全員）、合計87名（本部会員を含む）で昨年比23名増となりました。今後も随時入会を受け付けておりますので、希望者はお申し出ください。（年会費1000円）

健康妄語録 ALS患者照川貞喜さんの重い訴え

ALS（筋萎縮性側索硬化症）患者である照川貞喜さんのことを最近テレビで観ました。この病気は全身の筋肉の力が徐々に無くなってゆき結果的には死にいたるといふ、まだ治療法が見つかっていない難病中の難病です。1940年生まれの照川さんは今から20年前の1989年、49歳のときに発病、3年後には人工呼吸器を装着するようになりながらも、つねに前向きに生きて来られている方で、以前「泣いて暮らすのも一生、笑って暮らすのも一生」という本も出版されています。

現在、呼吸も栄養摂取も排泄もすべてを人工機器にゆだね、まったく動くこともならず、ただわずかに動く右ほほの筋肉の動きをパソコンに連動して意思を伝達しているのですが、その彼がついに重大な決意をしました。それはやがてまぶたも動かなくなって視力もまったく失われ、ほほの筋肉も動かなくなれば、意思疎通が完全に遮断されてしまう。後は暗黒の中でただただ生き続けなければならない。それには耐えられないので、そのときは“人生からの栄誉ある撤退”をさせてくれ、つまりそのときは“人工呼吸器を外してくれ”という訴えです。生き行くことも、自殺することも自分自身ではどうにもならない彼の悲痛な訴えです。彼の家族も話し合いの結果この決断を支持しました。

彼が入院している千葉県鴨川市の亀田総合病院の倫理委員会も長時間の検討、議論の結果これを認めて病院長に上申しましたが、病院長は、現在の法律では人工呼吸器をはずした場合刑法に触れる懸念があるとして同意するにいたっていないようです。

評論家の柳田邦男氏は「人工呼吸器を付けて人工的に延命している人の終末をどうするのかを社会的に決めてゆかなければならない。現在の法律では対処しきれない」と問題提起されておられますが、皆さんは照川さんのこのあまりにも重い訴えをどのように受け止めますか。

左顧右眄～さこ・うべん～（26）【第4話 気と気功をどう理解するのか】

かねて、担当教室で皆様に配布してまいりました「指導用資料」の「気」「気功」にかかわる部分を新たに書き直しましたので、「左顧右眄」の第4話として改めて連載いたします。

「指導用資料」については、新入会員用ガイダンスに目的を絞ってコンパクトなものに整理して、その都度対象者に配布、説明する予定です。

1) 「気」という文字の変遷

中国の古代の「殷」や「周」の時代に使われていた甲骨文や金文には、現在の「気」の原型と見られる、漢字の「三」に近い文字や右図の①のように変化した文字が用いられています。また、春秋戦国時代に活躍した孔子（前 552~479）の「論語」や老子（生没年不詳）の「道德経」には「氣」や「氣」を含む言葉がすでに用いられています。これらの書は当時は竹簡、木簡や帛書（絹布本）などで、字体は木簡体と呼ばれているものです。この後、中国全土を統一した秦の始皇帝（前 259~210）が篆書体を制定したことはたいへん有名ですが、その「気」の文字は右の②のとおりです。



さらにその後、中国最古の漢字字典である「説文解字」が西暦100年に編纂されました。そこで、「気」「氣」について字解と語源が明らかにされました。「気」は雲気也。象形。とあり、「氣」は「客に芻米を饋るなり。」「米に従う気の声。（形声文字の意味）」とあります。これが現代につながる「気」と「氣」についての基本的な解釈です。

ちなみに、現在中国では「氣」の簡化字体として「气」が用いられていますし、「氣」は日本の常用漢字体です。便宜上ここでは、常用漢字の「氣」を使用して書き進めます。

2) 「気」と「氣」についての字義

この両字については、手持ちの「漢和辞典」によると次のように書かれています。書店で立ち読みした中国の字典でも、ほぼ同様の順序配列で説明されていますので、ここでは分かりやすく“日本の”「漢和辞典」に沿って説明します。

まず本字の「氣」があります。これは蒸気・雲気の立ち上がる様を意味する「象形」となっています。次に「会意形声」文字の「氣」（常用漢字では「気」）があります。“「氣」は「米」と、立ち上がる湯気をあらわす「气」とで、米をたくときの湯気の意。借りて、雲気、空気の意に用いる。”とあります。「氣」の意味について、この漢和辞典は次のように詳しく説明しています。

キ=气 (ア) 水蒸気・かすみ・もや・霧など。空中の水分。「雲気」。

(イ) 空間を満たす、形の無い物質。空気。

(ウ) 気体、ガス。

(エ) 風雨・寒暑などの天地間におこる自然現象。天気。

②息。呼吸。「氣息」③におい、かおり。「香氣」④（においを）かぐ⑤心身の活動のもとになる力。

「病氣」⑥心の働き。「心氣」⑦生まれつき。持ち前。「氣質」⑧力、いきおい。「活氣」⑨様子。おもむき。「氣品」⑩万物生成の根源の力。「元氣」⑪万物のもとになるもの。「原質」⑫一年を二十四分した1期間（二十四節気）。転じて時候、季節。

「気」という、たった一音節の言葉の持つ意味の広さと深さに改めて驚かされますが、これらはすべて「①キ=気」から展開されてきた解釈であり、使われ方であるということの理解がまず大切です。

旅をうたい拳を詠む 春さまざま

カッカコッコとつがいの鶴の啼き交わす

釧路の雪野春遠からじ

武家屋敷の庭の椿は崑崙黒

宝珠と八重のひとつ樹に咲く（佐倉市）

ようやくに競うがごとく咲き始め千鳥ヶ淵の春は全開



（写真は千代田区の千鳥ヶ淵）